山姥
みつやま
檜垣
冨士太鼓
をしほ

十五

山姥

次第 善光ぞと影たのむ〳〵仏の御
寺尋ねん ワキ詞 是ハ都方に住居仕る者
にて候又是に渡り候ハ事ハひやくま
山姥とてかくれなき遊女にて候か
が様よれ名をや謂ふ山姥の山めぐり
すると云ふ事で曲舞に作つくれ唄ひ

宮こより京童部にやあらりていで
此比は善光寺へ法しまゐり有たき由承候
程に某も信心やがて今信濃国善光寺
へと急候　都をおくるよしや志賀の浦
船こがれ行末はあらちの山越よ
露ちる玉江の橋かけて末ある越路
の旅思ふや家路なりけるあさ　梢波立
塩こしのくあさの松の夕煙きえぬ
うさき身の罪をきる徳のつるきの乃と
あらの山路をあゆみす三越路の国の末
里とくへいつとく越の空をさかるはるひ門みも
ゑみするく　ワキ詞　御急候程に是ははや越
後地守の境行よは急ぎて胡目見えよ
あひて程に道の程も越もは寿あよ

まことにきく事や常に西方の浄土
は十萬億土とかや是は又弥陀来迎の
直路なればあげろの山とや読よまいりは
とてもとても修行の便なれば乗物をとゞめ
是に留め置かちはだしにてまいり候へし
道しるべしてたひ候へ ワキ詞 荒笑止や
いまだ暮まじき日にて候が俄に暮て候よ
如何と侍へき シテ女上 なふ〳〵旅人御宿
しまゐらせうず是はあげろの山とて人
里遠き所也日の暮て候へはわらはが庵
にて一夜を明させ給ひ候へ ワキ 荒嬉し
や俄に日の暮前後をぞんじて候に嬉
てまゐらせうずる シテカヽル いで宵の御宿しまゐらする
することは思ふ子細有山姥が歌の一

節謡ひて給はれや年月の望みも
里部の思ひでとも思ひし其為に社
日をくらし宿をも参らせて候へ
猶ふもうしさせ給ひ候へ ワキ詞 是ハ思ひも
よらぬ事を承り候ものかな抑ハ何とて見知らせ
て山姥の哥の一節とハ何とてぞ
シテ詞 いや何をかつゝみ給ふらんあれにましまし

ハひやくま山姥とてかくれなき遊
女にてましまさずや先此哥の次第と
承れバよし足引の山姥が山めぐりする
と作られたり荒面白や是ハ曲舞によ
りて其名を得給ひの山姥をバいかなる成
者とか知ろしめされてこそ ワキ 山姥とハ山に住
鬼女とこそ曲舞にも見えて候へ シテ 鬼女と

それ山姥の霊鬼となるよし物に成たる人の中にも
山に住女あり童が所作によそへてはたはぶるれ
まや峯此谷に迷ひさせ給ふその峯寒
は露霜をも厭はず峯に遊び給ひぬ恨やも又
里たゞ道を極めてこそ世情万
徳の妙花を開き下は此一曲の故なり
はやふうかわらも身をも弔ひ舞

歌音楽の妙なるの仏事をもなし
給はゞとくわれも輪廻をのがれ帰性
の善所に至らん事を恨とし山
は鳥獣も鳴そへて声をあぐるの
山姥が霊鬼是まで来りたり　これ
きの事をとやかくいはゞ我は誠の山姥なれば是
迄来りたり謡ひ給へ　我国々の山めぐり

ばかりも家に名あるやハ我名の徳を
ゆへん為世を遁れ給ひて去らでハ我家
執をとゞめし給へ 此上ハとかく辞しなれ
ハ恐しやげにある身のためやけりあんと
ざかりとなる時のてうしをとるや拍子
をまうけんとすれバ シテ暫ハしまち給へとよさらハ
暮るゝをまちて月乃夜声に唄ひ給はゞ

我もまた真の姿を現はしつゝやがて
きえつ夕月の ほのかに見えし姿を
見えし深山へ入るかと雲に見えがきを添て
此山うかむ一ふしをまずかゝへ給ひて
其時我姿をもあらハし衣の袖つぎて
移舞をまふへしといふかと見えつれハ
其まゝかきけすやうにうせにけり

節りれの中のみつきかりよ変よ迦となも
ほころびぬ花の詞をたのしと松風笙に
吹笛のごとく邑深わざる谷門にまよふ
洞へきさる曲水の月に声をしたる山かく
甚物すごの深谷やあらあらおすこれ深
谷や寒林に骨をうつ霊鬼なく〳〵
前生の業を恨み深野に花を供ふる
天人かへす〳〵も幾生の善を悦ぶいや
善悪不二何をか恨み何をか悦びや萬
箇目前の境界懸河渺々として
巌峨々たり山また山いづれの工か
青巌の形を削りなせる水また水
誰が家にか碧潭の色を染め出せる
恐しや月もてみつきる山陰より其さま

きしかたほかせハ其山路にてましゆ

もかひ　〔シテ詞〕中々なれや　わか初しこの姿

気色をみても恐ろしめさるべし。我におそ

れ給ふなとよ　〔ツレ〕此上ハ恐ろしながら

いかなるくまぎれより顕れ出る姿詞ハ人

〔ツレ上〕あれ其　〔シテ詞〕髪ハおどろの雪を戴き

眼の光りハ星のごとし　〔シテ〕扨面の色ハ

〔ツレ〕さにぬりの　〔シテ〕軒瓦の鬼のかたちを

〔ツレ〕こよひはしめてみる事を　〔シテ〕何にたとへん

〔ツレ〕いにしへの　〔上歌〕鬼一口の雨の夜に

神なりさわぎおそろしき其夜を思ひ

しら玉か何ぞととひし人迄も我身の

上になりぬべき浮世語りも恥しや

〔シテ詞〕春の夜の一時を千金に替じとハ花に清

清香月に影見ハ秋の〳〵風外ゆに行
遷人の一曲乃声猶もつゞく夜よふけ行く
唄ひ済ます〳〵
きくに洗ふ人ともかく
もぢずる声ぬ山中に 一声の山鳥
羽をたゝく 鼓ハ瀧の音 舞ハ白妙の
雪をめぐらす花の 袖かのとかへり
われもあらぬ よし吾事の山がらうく

峨々たる苔しき 高山とつらね
ぢりひぢよりたゞ天雲につらなる
でうの峯海とて 普見露にまさる
でんうをたちそれもいつり 一洞
空き谷の声 情に響く 山ひとつの拝音
心ぎくなたよりとありの声に響かぬ谷も
われと知るもしる見もや 秋

住山家の気色山高うして海近く
谷深うして水遠し 前には海水
瀼々として月真如の光をかゝげ
後には嶺松巍々として風常楽の夢を
破る 刑鞭蒲朽ちて蛍空しく去る
諫鼓苔深うして鳥驚かぬ気色までも
遠近のたづきも知らぬ山中に
おぼつかなくも呼子鳥の声凄き折々に
伐木丁々として山さらに幽かなり 法
性峰聳えては上求菩提を顕し 無
明谷深き粧ひは下化衆生を表して金
輪際に及べり そもそも山姥は生所も知らず
宿もなし たゞ雲水を便りにて至らぬ
山の奥もなし 然れば人間にあらずとて

ともすれば隔つる雲の身をかへ仮に自性を
変化して一念化生の鬼女となつて目前に
来れども邪正一如と見る時は色即是空
そのまゝに仏法あれば世法あり煩悩あれば
菩提あり仏あれば衆生あり衆生あれば
山姥もあり柳は緑花は紅の
色々さて人間に遊ぶ事ある時は山賤の

樵路に通ふ花の蔭休む重荷に肩を
貸し月もろともに山を出で里まで送る折も
あり又ある時は織姫の
窓に入つて枝の鶯糸くり紡績の宿
に身を置き人を助くる業をのみ賤の
目に見えぬ鬼とや人の言ふらん世を空
蟬の唐衣払はぬ袖に置く霜は

の月に埋もれうちすさむ人の絶間に
も千聲万聲の碪に聲のしでう
つハ唯山姥がわざなれや都に歸りて
世がたりにせさせ給へと思ふハ猶も妄
執かたゞうち捨よ何事もよし足引
の山姥が山廻りするぞ苦しき「一
串乃「山めぐり「一樹の蔭一河の流

れ是他生の縁ぞかしましてや我名を
夕月の浮世をめぐる一節も狂言綺
語の道すぐに讃仏乗の因ぞかし荒御名
残おしや暇申て歸る山の「春ハ梢
に咲かと待し「花を尋ねて山めぐり
「秋ハさやけき影を尋ねて「月見る方
にと山めぐり「冬ハ冴行時雨の雲の

シテ 雪をさそひて山めくり めくりめくり
て輪廻を離れぬ妄執の雲の塵
つもつて山姥となれる鬼女かありさま
見るや見るやと峯にかけり谷に響きて今まて
爰にあるよと見えしか山又山にやま
めくり山又山にやまめくりして行衛を
しらすなりにけり

通盛

一声 ワキ 是は阿波の鳴渡に一夏を送る
僧にて候 扨も此浦は平家の一門
果給ひたる所なれは痛はしく存
毎夜此磯辺に出て御経をよみ
奉り候 今夜も出て弔はやと
思ひ候 上歌 ワキ 磯山にしはし岩根のまつ

猶よつくだ毎とへ志ら波よ揖
音計鳴渡の浦静か成ど青らく
是ハ圭山寺乃鐘の声此磯近く
きこえ作 入相ごさめれいつかまく
まつあく暮る日乃ひかれ 明月すさ
と日ともれ あのまかくこう有
きれ 出れ共老よ頼まぬハ 身れ

う津の日数也 いれまて世をへるらむ
海れ前まりよひまも浪小舟 何を
軒ろよ老の身乃 命乃ためよつよ
へきいうやうさあくらのかおもさもうく
月の出塩のあ雨のみかけも面白き浦
ハ秋の風よ所ハ夕浪のおとる乃
沖よ雲つく淡路乃嶋や霞て見えぬ

浮世のわざぞ悲しき　暗濤
月を埋んで清光なし　舟よたくあ
まのかゞり火更るぞ苫よりくゞる夜
夜の雨の芦間に通ふ風あらでハ音
ひるおもねざれば夢か現かは経讀声
嵐につまそ聞ゆるぞや楫音もせ志
いかゝるを押へて聴バきくやと思ふ

ワキ上
なうや此あたりとれ沖に音するハ　漁り
定めぬ海士の釣舟ばよ　ワキ　舟もあらハ
その子細ぞ此磯ちかくよせ給へ　御僧は
随ひけりよせさせそ　ワキ　二人の僧ハ岩
おのよ　いかりぬ舟ハ岸の陰　ワキ　あし
火の陰を假初に経を開き讀誦する
かゝ稀やいかりまゐるわざの者あし　ひと思召

しよ　ワキ「よき燈よ　シテ「あるとも海の
弘誓深如海暦劫ふしきえんよ
よりらく五十展転の随喜功徳品
今ぞありかたや此経乃ちからにてそくろさ
浦風も芦吹風に波を吹そへて讃す
まして有難さ　龍女変成と聞時
嬉しく祖母も頼もしや祖父ハまよ
ならひ頭も三つの車の芦火は清く
あらおもしろし御経遊せく
あら嬉しや　いざ火の光あく心静よ
此経を讀なりてハちゞと此浦ハ年
家の一門果給ひたる前なれハ無数
け被為遊よ出て此経を讀なりけり
わきあ中成人此浦まで果給てハ

猶委くは物語候へ　仰のごとく或ハ
うたれ或ハ海にも沈み給ひて候中にも
小宰相の局こそやさしく諸あはれ物語候へ
上　去程に平家の一門馬上を改め海
士の小舟に乗うつり月に棹さす時も
あるは　家たにも数の書さきはとまの
浦ならぬ敵に行まゝて雲ゐを惜

む武士のたぐひの心ろ鳴や淡路がたの浦の浪
あるとよるよまり　去程に小宰相
の局乳母をちかづけて何とか思ふ
我頼もしき人ハ都にとまり通盛ハ
討れぬ誰を頼みにあかるべき此海に
沈まんとて侍従の手を取組み
かくよのうへ　去とても一門の海に扨

しつまりもとめ　沈むきみれなみや
縁の魚て浮み浪　西へとこそゆく月
入る其方もみへぬ大方の
春や霞むらん涙も共に曇る覧
乳母泣く泣くすがり付て此時の物思ひ君
一人に限らし思召とまり給へと御衣
乃袖に取つくをふりきり海に入と

見て老人も同じみちしほの底のみく
づと成にけり
此八軸の誓ひにて
一人も漏さじの方便品を読誦
する　如我昔所願　今者已満足
化一切衆生　皆令入仏道　通盛夫婦
此経よし　まそて立浪の　甚う経
は御法やあら　吉　かくさやあさもあかめ

きるは海の波よ浮しづみし給ふこそ哀れ
ある人々まし〳〵けり　名計はまさる
清盛のあに浪の守門脇のあるとよ沈没
し小宰相の局の寵愛也　是一人なる
甲冑を帯し兵具いかめしくみしけれ
めでたき人々まで思ひきや是は生
田の森の合戦よもひくかたを天下よ

きこえし武将也しがほまれども都にあれ三位
通盛卿しかと語んとまるよ思ふ頭を
むなしくあり　抑此一谷と申すは前は
海上は険しきひよどり越城よ鳥なら
てはかなうまじく歎もなしとたのむべき
地とたのみ　唯鉄壁も過手の陣
を心得ありさまうつくしむねとして一門

かゝりける所に通盛も其随一たりしか
そのゆふぐれ我陣より小宰相の局に
向ひ既軍明日とき〻ぬ痛
はしやわれハ通盛なうて此うち頼
むべき人あらじなげきとも力も成ぬは
都よりつれ来しハ我跡をとひてたひ
給へかしと情ありたる盃通盛節をとう

ぎれつゝさら胄のまもらうちに成
むつことたとへハ唐の項羽高祖の責
をうけしかば虞氏か涙も是にハいかで
増るべき燈をかゝげて月の夜まさし
向ひ語り慰みしよ舎弟の能登
守はや甲冑をよろひつゝ通盛へ行く
かうなし通盛ありつゝとうてよハりなし

其色の義をつしや経也守が身
としひさ他人より殊もつしや勝
すてかふそてかゆれ無一首の句
つゝまるの山方なかきうひかれ
去程に今戦をまけ候へば但馬守経正
正もりや討されぬとや　薩摩守
忠度の最期は　岡部の六弥太

忠度と申て討まいらすれば天晴通盛
もしなある物もがれば討死せんと待かける
ぞはあまきをみよふ敵は武蔵の国住
人木村の源五重章が鞭をあきを
てかゝきたる通盛をうしもはかく
うひめさいまうけたる太刀あれば甲
のまつかうちやうとうちかへをたち

さては上人去よ修羅道の苦を
受苦あられたるをたまよく弔ひ
てたび給へ　讀誦の声を聞時は
悪鬼こゝろをやはらげ忍辱慈悲の
姿にて菩薩も爰に来迎す成佛
得脱の身となりゆくぞありがたき

檜垣

ワキ　是は肥後の國岩戸と申山に
居住の僧にて候　扨も此岩戸の
觀世音は霊験殊勝の霊地なれ
ば某も山籠し所の致景をみるに
南西は海雲漫々として萬古心の
中にあり人まれにして慰おほく

致景あつく御室もはるまてとよ
住べき霊地と思ひて三年か間は居
住つかまつり候又百歳にも及
ぶらんと思しき老女毎日あかの水
をはこび来り候今日も来りて候は
いかなる者ぞと尋ねばやと思ひ候
かけを白河の水くめば月も袂
を濡らすらん又籠鳥は雲を恋ひ
帰雁は友を忍ぶ人も又是に同し
貧家には親知少く賤しきには
故人うとし老悴衰へてたつもやく
露命きはまつて霜雪よ似たり
おもふる水れ我よのみてとり掛
汲みてきつる家は何も白河のつく

水ちに深き其罪どうらひやもちると
捨人は値遇をもつて是非の山下
庵思ちよ慕はきり出なさいほまよ慕
みそり　いつものごとくきまきにも又は
石あきてしまりては　毎日若女
乃歩みぬこても痛りうこうはへ
世めくへかやうれるまて社少乃

罪をもわするゝ人ぞれがあり続え流をと弟
ひ給はへ明あいましまりはへしば
瞬いはれん　猶く清きうえをお
のう筵へ　あまてゑとあのまとはや
中とのす　是ハ思ひもよらぬ仰
哉ばな撰集は今よ筆かれそ我
らうかうも白河のごうりは返若よ

きゝかたりし讀しも童が言なりバ昔
筑前の太宰府に庵に桧垣しつらひ
て住し白拍子が後にハ衰へて此白
川の邊に住し也　云ひけるすと
ゆすしありし其比川の邊りにありし
に藤原の興範通りし時　女　水やあ
ると乞ひ給ひしに其水汲て

女
しまゐらするとて　甲　白川の水やハ
讀し也　上　うもミつ王ぐむとやハく
此白川の水にはあらず老てかゝめる
姿をハミつ輪くもとやもとありし其
志る事しかも見え給ひ彼白川の邊と
思ふて我跡やひとしかミ下とし夕
まくれしてけふまきりく　甲　拇ゐ

古の桧垣の女候ふにあらはれ我に詞を
かはしきるうやぢうつは妻女の亭物か
うと思ひおもふも事やきは　かしき
庵もやく日も暮てゆく露の
かく立てきる隠よ庵りの灯の
ほのかよ見ゆるかしきよく
女「あらあり難の弔ひやあら甚有難の弔ひ

や那　風緑野にれさまよひて忍ん
てうあひて雲とともに空まよく
月桂まとひかや也朝よ紅顔あつて世
路よたのしんといへ共　夕よは白骨
となつて郊原よくちぬ　女「かゝる為の
有様　地「世の常のまこと　女「猶生死
のさとりを論ずる　同「い庵を隠る

あらよしなや老少といつぱ今ならず
替るをもつて期とせりたまさかに
滅をまぬかれん術ならば是を期とす
らん　ワキ詞　かきやあき老をゆかしかる
人なりけるかや姿をあらはし給
へしば跡をとひて給らん　女　はづかしや
姿を顕してだ僧に法を受べき
なりと人にあらはし給ひつるに
ワキ　仰しよ人に顕れ給ふ有さまげにや
姿を見え給へ　女　深くつゝめどもほ
ちせへうれたゞみぬれどころへを汲白
河のほとりに老の姿ぞ恥しき
ワキ下　甚痛りれはうの様やあだ今も執心
れ水をくみて輪廻の姿見え給ふや

上 ぎやくしゆ弔ひ給へ 女 我古ハ舞女のほ
まれ世に勝れし其罪ふかき故によりつ
ども苦ミを三瀬川にて熱鉄の桶をに
なひ猛火のつるべをさげて此水をとぬ
中 其水湯となつて我身をやくらん
隙もなき此罪ハ仏の値遇
よりかけてつるべハあまりに猛火ハあつし

下上 はらへハ因果の水をくまん其執心をと
かり捨てどく〱うかひ給へし
女 いそく〱はらへハ和僧のため此かき水
をとぬ ほさへ罪もやあはれあるへきと
下上 思ふもかなしきはよ衣の袂の露の玉
さゝひき 女 かき白河の月出ぬ夜よ
下 うつもみ水をいさ汲まん 上 つるべ

下 の水に影をうつして鏡と見ゆるらん

クリ 地 されば昴星の影よりは小溪の水とくみなん

ば菊の灯には南陽の瀧をたたく

サシ 夫秋は霧より出でて水よりも寒く

青きは藍より出でて藍より深し

本のうき身の幹あるは今の昔去

をきそ 下 いや増りぬる思ひの色

紅井の涙によそへとこそひとつなへの

クセ うきを縄くりかへしうき古も紅花の

春のあしたに紅葉の秋の夕暮も一日

芙蓉とやめぬ菊の粧錦共

ほまれもいときまめてばちをうつうき

紅顔の翡翠のかざし花ほまれ桂の

まゆも霜ふりて水にうつる面影老

實がき沈んでみるよりかなしき給へ
去水れもくづ塵芥がかゝりきるまでの
かゝる穢悲しきぞや うき世と思ひ
知れハあつやぞ其白河の浪かきし
藤原の興範の其いにしへの白拍子
と一かしと有しうへ昔の花の袖今更
色もあき衰へうき袖をぬらしぬ

心をつくし陸奥のけふの細布胸あ
はでも何とか白拍子其わざもうきの有へき
よしなくとても昔手引し舞なりせハ
まわしても今ハかなふまじと
のたまへバあまりあさましさの袖
露うち払ひ舞出の檜垣の女乃
身の果を水むすぶつるへ乃縄の

つるへ乃縄のくりかへし昔よかへ
れ白川乃あさきふる河の浪白河乃
水の哀をしるゆへよ是まて現
れ出なりけりてふあしたるの音
をしをたゆまうき草の水かれて
ひろくまいらもちるつるへをうへて
なをひ給へく

冨士太皷

是ハ萩原院よ仕へ奉る臣下也
扨も内裏よ七日の管絃の御座よ
よつて天王寺より浅間と申楽人
是ハあまねくかくれなき上手なれは
を召上られ太皷の役を仕る所よ
又住吉より冨士と申楽人是も望ミ

ぬ太鼓の上手なるとて管絃の役を
望み上りて候此由申す處に富士は
何とも面白き者也去なから古き
手になれしのなる浅間の嶽をゆる
といへ共富士の煙のうひやおかるを
はや附くだりぬらうへなすさみし此花
おのれは浅間はまさらすると思ひて

勅答かくしよりも宣て富士と申者
をおくは去程に浅間此よしを聞き
きのしり振舞かれとてぞ彼富士を宿所に
ようをおくへおくり冨士をうたせ候ぬ誅に不
便のしな第にて候所に冨士かゆかりの
者さそりいんまで尋参りて候
形見をとつかさゝやと存候
雲の上

まうで過なるく富士の行ゑを尋ん
是ハ津の国住吉の楽人ふしか申
人の妻や子みなくしばかりも内裏に七日
の管絃のましましけるより天王寺より
楽人浅間しまろ由をきくやいなや都も
太鼓の役世よかくれおきれハ都へ上り
さん其ため都へよりし夫のまれ

夜半の心よかゝる月の雨　そゝぐる袖の
涙とともにあかねたるよそほひ

上哥

住なれしまぬるよ思ふかうく雲井
やうらの古郷ハ松あれしや住吉の松の
陰より詠もしきハ月落かゝる山城も
ちかやつきは笠ともぬきば情よい里
掛帯のむもよ繋りの夢おもく

いつよ逢や男山都よりもやく急は
まりとく急ぎ程よ都につきては
此前にて富士の山はいづれかを尋ねやと存る
いつよ葉月に是は富士の山の
者にしばしよりきたりて候へ
富士の山とやは何くにあるぞ
見えたり 抑是は如何なる為行にて有

う恥しあつま妻やみなりし あつま
富士のたかまてよ何と富士は詩を
たらとしや中にも富士は詩聞よ詩を
ては 様は社思る今もし西学れてろ
童てとつなかくよ詩聞よ詩を青あ
くはしも高きにかへあし煙とへ所
めらんべうき数くよ其のひもあさき心よ

猶る正學ぶみるかゝよりて捨もとも順ゝ
かまひあへを伊勢のへ欽らくもひあらさ
るすえてからず此社一かの莽の將軍家ば
よぶまき人の欽きはへ形かれよると云る事
あし是きみらく日と慰めんへ世は海
造る行忽もまぶら動人の童と回ハ志れ
去と思ふてぬかり停ふとゝ哉しは職ども

るき身甲月日も替らぬ將衰の類は
所をあらへ社揃りや彼人出給ひし時
かつらややうず夫王寺の樂人ハなかて
よりたへ伎ちハ勅定あきはだれして是れ
も下としてかん是とハかるに似たるへし
其ち何にみる當社地給の樂人ハ乎て唄
非よ仕へやうハ何れぬ其これなるべきやと

やさしとぞ思ふ額にて出給ひし　こち面
影うつすみぞへと志乃至はまよふあとの
見れば筐ぞよしあさい魚てよりかくうき
きと思ひあかく有べきと思ふあかいざうて
うろ手もと出し房もんぬ縁かひ深みそてもとむ
へきこあと今使よだもあめろもそうか糺
ともだ数くるよれある数くるし衰ゆる

葉うらめしやめやめや恨あれは妻ゆゑ敵の
作うやいざうたん　あれは太敵みくし社
之思ふ思ひの深きよりおこる乱きぢちあきさう
と作ぞやあるはまやが作うさそれ
人のいひやあやあそあれ　我妻をせ
み人もも太敵ながく恨めしきは太敵あり
妻の敵よいだうたん　字こそとうけなり

父ぞよおもへばもたゞゆくへざあらば親
の敵をうつて恨をはらすべし　童
子なめよ妻のかたきいちや討つべきところ
ともよ　男の姿持衣よそのつきおもれや
鳥甲　恨の敵を討たさめ　つきを
若よ　うつまんとて　よそする夜討の壱
立てばの風よりぞ除しや　世にうてやく

と責つゞみ　あら増のがたく音やあ
上哥同　雄打も思ひハ腹たちや　ッぎしなき姿
よおもひて心言葉もなかりあぶりけむ
恋するとみえて則よりおのうらみやとど
いしと太鼓うちたるや　持ちるもち
をハ鉾と定めつく嗔恚の焔ハ太鼓なれ
烽火の天にあがれハ雲の上人城のうち

れつしよ絶えもまたれてもちる跡の桜色
方へちつと敬ひみて花散る手も
ひくゐ色俗人の罪あれは太敵のやく
へ太すようやかゆる影のさしむかふは
だらひあやなすつう座うちや女人に
悪心煩悩のやも晴て五常楽とう
ちたまへ修羅の太鼓はうちやまぬ

此君の代はいのちも千秋楽とうたふよ拍
子の舞や萬代とかへも栄へて安穏
み泰平楽とうたふよ蛇もちゝよかる
かきあへず山の端とおゝめやまてまね
きりつはまひの手の影うたや人うるう
思ひきや立ちうち太まぎ移て狂と
やまとゞん我よかきあり胸のきょう室

りの恨ミもとてもきるは涙こそうらの数かりきれ
思ひ出ゝ成やしとよく眺やてはるも
いと今人の姿身もみぬかぬ思き捨て
我心ぞ尤ぞ笠もくれ装ひし思ふへ
是れとまつ立つくまた戦こうき
人の形もなりきれとぞ直て帰る
色まる跡も直てそうつりまれ

小塩

ワキ 花ようつろふ顔の雲くかかれや心
あるも世を
ワキ詞 加様に候者ハ下京辺に
住居する者にて候扨も大原野の
花じこそ盛成也承及候間若き人々を
サシ 伴ひ只今大原山へと急候
面白や頃く春あれと前かつ花も

都のあらしおくるなる大原山の花桜
今を盛とゆふ花のうつく向の雉も
なくしほよ色そふ春の時をえて都
もまいる塵の世の花や四よまうは
誘んく　志ほりして花をかさし
の袖おもう若木の桜と人や見ると
年をきへ齢そ老ぬしかはあれと花

をし見れは物思ひもなしと詠しもことはり
よよ今白雪を戴く迄ぞうりまあつる
春の日は長閑き代の時はあまりや
散るも桃も咲る藤も残らぬ花さかりうつく四
方れきしきも一志ほよ紫ひみちく色よ
そも情の道よ残りつる若きも厭ひく花
心ぐく　かしきやおお貴賤群集の其

中にも殊に年たけ老人花の枝を
かざしけるも花やかにみえ給ふにぞても
何よりまた給ふなり　シテ詞 思ふよしもなしや
貴賤の中にわきて言葉をかはし給ふは
色香妙なる山賤の身にも[illegible]きぬ花すきさ
ことお笑ひあるかに人よ浮しそ山がつ
きれに似よりたる花におもしろそ

かきはおもしろやなりけるに　折りしとさう
言語もとめかはしや此君は埋木乃様ハ
げそしあやしのかげも青もたる人ぞ
まこそあふとも世絵ひぞ　ワキ詞 あら面白の
たのもしきやおよそも誠に八幡立給ひしいろ
桜あるはさくら奥家おやき語り給へ
シテ詞 何とか語らん花盛りつなほりぬきまさしき

さとさびかくハ思ひ出る世に　実に時成
梢の色もうつろふ陰も大原や　小塩の
山の小松が原よりも煙る霞の遠山桜
里ハ軒端の家ざくら　匂ふや窓の梅も
いかさ　あかねさす日も紅の　かり人の
雲か八重九重の都邊ハなべて
錦と成よすがら桜をたをりぬらし

あらさ花衣きよきりぬ時を日も月も
深生相よあまあまあまねく空や大原や小塩
の山も今日こそハ神代も思ひ出らるれ
きぬらく　かく面白き人よしまうあ
ひて作るれ洩まく御信ハ花とも
あらめまもるとてば又昔の今の言葉の
もとよ大原や小塩の山もきかぬるは

神代世々の事も思ひ出らるゝ今有かたし面
白かりし時の人の古き詠歌をそ
事問ひしさに向ひかけ池大原の行
幸に在原の業平供奉し給ひし時
かざしきれくも后の御事を思ひ出て
神代のことゝなどよしとありけりやよつぎを
と我おもふ空ぞ知るらや天地の神
世々代よりの人の身ながら妹背の道は浅
からぬ名残をば思ひやる山深くの
ほりくの世の物語りかこちもし昔男
色好みなる身の程を思ひはかり
きり歎てもかひあらしきれ嵐山
賤のさしも及ばれぬ人と思ゆるよ
も心ありける姿かな心まで跡も

月の姿はちらぬ花のなみあかねとさる
はれし世を　まゝや　まいれ老人の
心ある木の花の枝　老らくれ身とかざさく
世を　かざしの袖をひきむすびこれも
花の蔭にて　貴賤の花見人

地
あくる海の花のあうえをかざしつゝ
てよろぼひさうらひとりくまめれ

はるさの天も花にやえられ誘くれ
都うつむ夕霞がきろふ人の面影
ありとみしつゞよきりく　ふし
まや今の老人の昔人なすしひみしつる
かゝ梅ハ小塩の神代の古跡和歌の歌
よ業平の花よ詠みく流生海度の
姿顯し給ふそと　思ふれ露もゝ海

さうもくざうりとなるも花心妙なる
法の道乃へみ移も寄移とまらぬ居
うつく　月やあらぬ春や昔乃
春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
かきつはた今まさしくさまつたまぬ
花の車乃やすらひめぐる人の法の移れ是
はかなりけり残　やや残ぬ一つ

上花の姿さよもきし有し形代
のおん語り姿顔はかりあら　あら
かう雑乃法ずや仏生乃縁は移を捨て
契りし人をも様とよ　思ふいつる
花もと　きぬこひそあひは雲こそ
降あましく消をもありしかやと
みましやと詠をしは今はさきれの花

もし雲もみな白雲の人の櫻かざし
池水まで花見車くるよりの月も影
花よ紅葉よ　春宵一刻價千金
花に清香月に影惜しまるべき時なれや
此時なり　あそふいさて唯よや座
あへきが我まことしき人　あけまは
ことに思へ唯人ごと心の色はもとの門

かつ思ひうつろふ言の葉の露もちらく
またれつるや春宵の若葉の
もす哀ぢよの乱れ限りもなく
詠めし陸奥の忍もぢずり誰故ぞ
乱れんと思ふ我ならなくに
もしほ草の色をよそに書とめて
あづまの八橋の物きて　あさき

みつましあきハだちおくこさぬる桜
をしほをふこその奥迄ハたえて
雲のよそなる月乃都おきるや東山
是をまたあはれまつちそしるの人の
あはれやむさし野をきよふハなやき
そわか草の妻もこもれり我もまた
こもれるころハ大原やをしほにかよひ
通ひ路のゆくゑハ知らじ夢うつゝ忘れ
めや今も名ハ昔をとこと人もいふ
もしられ昔かおもふ花も月も
ちられあまし時幸を花も忘れ
花も忘まぬこゝろやちとしほの
山風ふきみだれちらせやちらせ散
まよふこ乃もとおもしろのめハ桜よ

むまへ苗夢うつゝかよひと定めよ
くずはらくさめくかまよの月
あきはのくもれはみや頼さん

右之本者観世太夫織部
章句真本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛